

廃屋墓における葬送儀礼の諸行為

― 縄文時代中期・後期の東京湾岸地域の事例 ―

中村 耕作

一、本稿の目的

本稿で扱う「廃屋墓」とは、廃絶した住居を葬所とする縄文時代の墓制として、東京湾岸を中心とした貝塚地帯において概念化されたものである。縄文時代に限らず、墓の多くが大地を穿って設けられるのに対し、既に住居として利用されていた家屋や、その跡の窪地を墓所に転用することは、モノとしての家屋、またはその「場」、あるいは「イエ」への特別な意識を感じ

させるものである。⁽¹⁾

論者の概念規定によってその範囲は様々であるが、⁽²⁾本稿では、広く堅穴に葬る行為を「廃屋葬」、その場を「廃屋墓」と呼んだ山本暉久（一九八五）の用法を踏襲する。

山本は日本列島全域を対象に類例を集成し、その大半が中期～後期の東京湾東岸地域に集中することを明らかにしたが、その後の集成でも大きな変化はない（山

田二〇〇二、山本二〇一五b)。人骨を遺存する貝塚集中地帯は他地域にも知られているので、この結果が一定の歴史的意義を持つものであることは山本が強調する通りである。

しかしながら、少ないとはいえ、堅穴住居からの人骨出土例は前期の北海道や埼玉県で事例が知られており、中期には本稿で検討する中期後期の東京湾岸での多数の事例のほかにも、青森県や岩手県、後期には長野県、愛知県、大分県、晩期には岩手県、静岡県で人骨を伴う事例がある。また、人骨は確認されていないが、覆土中のローム質土のマウンドや赤色顔料などが、廃屋墓を示唆する遺構が北海道野田生1遺跡で一定数知られており、その普遍性的の実態説明が必要である。

一方、なぜ東京湾岸の廃屋墓が中期後半に集中するのか、という問題も合わせて検討する必要がある。既に山本によって、この時期にみられる各種の屋内祭祀と合わせて「世帯の個別化の方向性」に関わる現象として、縄文文化全般に係る重要な見通しが示されているが、例えば、山本が挙げた事象の一つである敷石住居の盛行は加曾利E3式期以降の中部・西関東であり、

その時期には東京湾東岸の廃屋墓は最盛期を終えているなど、関東の東西における諸事象の具体的な関連性をさらに検討していく必要がある。

筆者はこれまで関東中部地方、東北地方北部北海道南部などにおける縄文時代前期後期の堅穴住居床面出土の土器・石棒・パン状炭化物などの検討、あるいは廃屋墓の盛行期に並行する中部・西関東の中期中葉後半の釣手土器にみられる地域間関係を検討してきた。しかし、前者の遺物が床面に置かれる意味については廃屋墓の可能性を想定するに留まり、また後者については釣手土器を持たない東関東との関係性が課題となってきた(中村二〇一〇、二〇一一、二〇一三、二〇一五a-c)。

本稿では東京湾岸における中期後期の廃屋墓において、いかなる「行為」が行われたのかを整理し、縄文時代の廃屋墓の定点を示すことを目指す。人骨の検出が見込めない地域における遺構・遺物・土層の状況との比較検討の基礎資料とし、廃屋墓の普遍性・特殊性の問題解決の一助としたい。

二、廃屋墓をめぐる前提的問題

廃屋墓の一般性の問題

本稿では、千葉県・東京都・神奈川県の一〇軒（二二一体）の事例を検討する。時期的・地域的な分布は表1に示したとおりである。東岸（千葉県）の勝坂式期（加曾利E2式期）ものが大半を占めており、西岸（東京都・神奈川県）のものや、加曾利E3式以降の事例は少ないが、堀之内式期にややまとまった例数がある。

当時、廃屋墓のほか、墓坑ないし小竪穴を用いた土坑墓も存在した。後期にはこれに再葬・合葬土坑墓が加わる。これらの中で、いずれを選択するのか、またそれが一般的であったのかは大きな論点の一つである。

当初、山本暉久（一九八一・八六）は内陸部竪穴床面の倒置土器も土器被覆葬の所産と考えていたが、その後、京葉地域の廃屋墓に対し関東西南部においては環状集落中央部の墓坑群が一般的墓制であったとした（山本一九九二）。しかし、山本の最新の論考（二〇一五b）では、住居址数の多さに対して事例そのものが少ないことから、京葉の事例についても特殊な事情（不

慮の死・疫病死など）を想定している。

この問題は、既に清藤一順（一九七七）によって指摘されており、人骨遺存例は少ないものの、本来は小竪穴を用いた墓制が広く行われていたのではないかとの問題提起があった。堀越正行（一九八六）は、中期を対象に、骨が残りうる貝層を伴う竪穴と実際の人骨出土の軒数の比率として、平均三二％の数字を示して

表1 東京湾岸における廃屋墓の事例数

	東岸		西岸		総計	
	軒数	人骨数	軒数	人骨数	軒数	人骨数
勝坂	3	12			3	12
加曾利E1	32	68	1	3	33	70
加曾利E2	17	31	3	8	20	39
加曾利E3	5	9	2	2	7	11
加曾利E4	1	1			1	1
その他中期	15	28	3	8	18	36
中期合計	73	149	9	21	82	170
堀之内1	16	27			16	27
堀之内2	3	4			3	4
堀之内1～2	4	12			4	12
加曾利B2	1	5			1	5
安行	2	2			2	2
その他後期	1	1			1	1
後期合計	28	51			28	51
総計	101	200	9	21	110	221

※住居の最終使用時期と埋葬時期が異なる場合、軒数は住居の時期として集計。

いる。また、小竪穴での同様の統計は無いが、中期全体の検出人骨一七三体中住居床面二九%、住居覆土五〇%、小竪穴一五%、更地六%という比率からも廃屋墓(住居覆土)が一般的であったことを主張している。

その後、高橋龍三郎(一九九一)は加曾利E3式期になって、それまでの一棟に複数遺体を収める葬法から、一軒一体の葬法に変化した結果、住居構築回数が激増したとし、この時期の住居軒数の増加は人口そのものの増加に直結しないとの解釈を示している。

なお、一方、東京湾西岸では土坑墓群が目立つが、少数ながら廃屋墓が検出されている。住居数と土坑墓数の不均衡の問題も同様に生じているので、これ以上の検討は難しい。人骨の炭素窒素安定同位体比分析では、向台貝塚・姥山貝塚・草刈貝塚などの廃屋墓人骨の一部に食性の違いが認められている(米田二〇〇八・二〇一一など)。mtDNA分析では草刈貝塚B516の男性人骨二体のハプログループに差が認められた(篠田・安達二〇一一)。廃屋墓以外の人骨を含めた検討が進むことを期待したい。

被葬者の人数・タイミングと上屋の問題

廃屋墓に葬られる人数は、単数と複数の場合があり、大きく見た場合は時期差ととらえられる⁽⁵⁾。

問題は、それらのタイミングである。遺体の検出面は、床面レベル、床面直上、第一次埋没土中、第一次埋没土上面、それより上層中など、多様であり、堀越正行(一九八六)は、「住居床面葬」・「住居覆土葬」の用語で両者の違いを強調している。さらに同一レベルでも、同時と想定される例と明らかな時期差が存在する例がある。これらの違いは、住居が廃絶され、埋没していく過程のいずれの段階に遺体が置かれたのかという違いである。単に窪地の深さだけなら大きな問題ではないが、廃屋墓に限らず、縄文時代住居一般の問題として、①覆土・遺物の埋没過程の複雑さと、経過時間の問題、すなわち人為的な埋め戻し・配置か、自然堆積か、あるいは第一次埋没土が土屋根に由来するかという問題、②その際、上屋はあったのかどうか(柱は立っていたのか)、廃屋墓の場合は遺体が置かれた当時、「家屋」だったのか、窪地だったのか、③住居入口・奥・左右などの位置関係と遺体が置かれた位

置などの問題がある（大場一九五五、小林^達一九六五、末木一九七五、石井一九七七、山本一九八七、黒尾一九八八、江森一九九一、関間一九九五、谷口一九九八・二〇一一、小林^謙二〇一二、阿部二〇〇二、櫛原二〇〇五など）。

これに加えて、墓坑の掘り込み（四柳二〇一一）、複数のタイミングでの埋葬、改葬の存在などが指摘されており、事態を複雑化させている。こうした問題については別稿を準備中であるが、本稿を進めるにあたっては、単独被葬者の土坑墓と異なる点として、行為の対象が単独と複数の両方が存在しうることを念頭に置く必要がある。

なお、以下の記述において時期を以下のように略記する。（勝）…勝坂式期、（E1）…勝坂式末期、加曾利E1式期、（E2）…（E4）…加曾利E2式期、4式期、（堀1）…（堀2）…堀之内1式期・2式期、（B）…加曾利B式期、（安）…安行式期。

三、遺体への行為

（一）安置場所の整備

墓坑・枕石

寒風遺跡1住（E2）では、炉脇の床面に八五×四〇cmの小土坑が掘られ、屈葬人骨が検出されている（図4）。頭部の下に焼けた礫石一個が置かれており枕石の用途が推定されている。草刈貝塚B区207B住（E2）では、一〇五×五八×五cmの墓坑、中峠貝塚3次1住では4号人骨用に一六〇×一二〇×一〇cmの墓坑（人骨は坑底やや上から検出）、同5次1住4号人骨用の「やや掘り窪められた」箇所、高根木戸遺跡3住（E1）では床面の人骨下に墓坑らしき掘り込みなどが確認されている。いずれも浅いものであり、床面からではなく覆土から掘りこまれたと解釈すれば（堀越一九八六）、覆土内墓坑の事例となるが、もともと少し掘り窪めるだけであった可能性もあるので判断できない。確実に覆土から掘り込まれたものとして有吉南貝塚354住例（E1）がある（図1）。確認面で約一〇〇×八〇cmである。草刈貝塚H区489住（勝）では、床上の貝層から床までを掘り込み、炉の一部を切っ

て一一〇×五五cmの墓坑が構築されている。炉面からの深さは一五cmである（図3）。

墓坑の場合でも、墓坑底面と遺体検出レベルが一致しない場合がある。加曾利南貝塚J D 16住では、墓坑底面から約一〇cm上から人骨が検出されている。菱名貝塚では覆土中から掘り込まれた墓坑が床面を約二〇cm掘削しているが、それを約三〇cm埋め戻した後で遺体を安置している（堀越一九八六）。

後期の例では、曾谷貝塚E 4住〔堀1〕の貝層中で、明瞭な掘り込みは検出されなかったが、ロームブロックを含むなど埋め戻しの痕跡が認められている。殿平賀貝塚〔堀1〕では床面から掘り込んだ五三×三九×三二cmの小形の墓坑が検出されており、小児頭骨と遺体を覆っていたと考えられる土器大形破片が出土している。加曾利南見塚12住では、堀之内1式期の住居床面を掘り込んで、加曾利B式Ⅱ安行2式期の土器を伴う墓坑が検出されている。なお、大膳野南貝塚J 77住では、漆喰による貼床下から幼児骨・土製垂飾を伴う墓坑が検出されているが、廃絶以前の所産の可能性が高いので廃屋墓からは除外しておく。

底面の整備

遺体を安置する場として、墓坑のほかにも前もって整備する例がある。中峠貝塚3次2住の5号人骨〔E 1〕は、分厚い一次埋没土上から検出されたが、「遺骸が置かれた貝層下土層は上面がならされてあつたが、腰の部分が高く、頭部と脚部に行くに従って低くなるようになっていた」と報告されている。

後期の例では、加曾利南貝塚21住〔堀1〕で、中央部に一・五×二・五mの範囲で厚さ五〜一〇cmの灰層が「人為的に敷き詰められたと思われる」状態で確認されており、その上に人骨が置かれていた（図2）。前述した曾谷貝塚E 4住では、頭の下四〇×三〇の範囲に、厚さ四cmの灰が敷かれていた。

(二) 姿勢

屈葬・伸展葬などの姿勢の別は、墓坑の規模や遺物との位置関係などに関わる要素である。また、その遺体が遺棄・投棄ではなく、意図的に葬られたか否か、墓坑が構築されたかなどを判断する材料ともなってきた（佐々木一九八六、四柳二〇一一など）。林謙作（一九八〇）は、後期の伸展葬墓域形成の前段階としての

表2 廃屋墓出土人骨に伴う装身具一覧

根郷J5住1号	E1	男	鯨類骨製腰飾
根郷J5住3号	E1	男	イノシシ牙製腕輪
子と清水1号	E1	男	頭部無し・イモガイ製貝輪
中峠3次1住2号	E2	男	鹿角製垂飾
中峠3次2住5号	E1	男	イモガイ製品
中峠3次2住6号	E1	女	耳栓
姥山B9住1号	勝	女	イタボガキ製貝輪
姥山B9住5号	勝	女	イタボガキ製貝輪
向台22住5号	(E2-3)	女	タカラ貝
廿五里南	(E1)	女	貝輪
蕨立4住2号	(E1)		耳栓
有吉南354住	E2		鯨類骨製腰飾・イモガイ製腰飾
草刈B区202住A号	E1	男	鹿角製腰飾
草刈B区480住	E1	女	耳栓
草刈H区489住	勝	男	イタボガキ製貝輪
祇園W外	E1		鯨類骨製腰飾
市谷加賀町二丁目3住12号	E2	男	鯨類骨製腰飾・鹿角製品
矢作1号	堀		鹿角製品

廃屋墓内伸展葬の意義を指摘している。埋葬姿勢の詳細は先行研究（宇田川一九九三、山田二〇〇二）に譲るが、ここでは埋葬姿勢を検討できる事例のうち、屈葬・伸展葬・部分骨・散乱骨、判断保留の例数だけを

確認しておく。中期加曾利E1式期までは、屈葬三八体、伸展葬一一体、判断保留八体、部分・散乱骨三体である。加曾利E2式期〜4式期は屈葬二八体、伸展葬一一体、保留二体、部分・散乱骨体一四体である。これに対し、後期では伸展葬三〇体、屈葬五体、部分骨二体、保留四体である。

(三) 伴出遺物

着装品

廃屋墓人骨に伴う装身具は表2の通りである。殆どが有機質の装身具であり、内陸部の環状集落中央墓坑群でしばしば出土するヒスイやコハクの玉類は見られない。なお、鯨類骨製腰飾は六例全て（図1・2）、環状イモガイ製品は九例中四例が廃屋墓出土であり、男性骨に伴う（渡辺・西野二〇〇六）。一方、耳栓・貝輪は女性骨に伴うものが多い。

副葬

土器・石器などの副葬品は、少ないが草刈貝塚B区551住（E1）では完形の浅鉢、高根木戸遺跡26住（E2）では、胸部から深鉢、千鳥久保貝塚〔中期〕では8号人骨の下肢骨に接して赤彩浅鉢と大形の破片

二点が出土している。貝輪を伴う祇園貝塚4住W外人骨は、頭部に土錘・石錘、頭部に一点、胴部に二点の石鏃、肩と腰に石斧が置かれていた。

中峠貝塚3次2住5号人骨の足先約三〇cmの箇所倒置された深鉢口縁部〔E1〕が検出され、その中からイタボガキ製の貝輪が出土している。倒置土器の性格を頭部の被覆に限定できない事例である。

千駄木貝塚C区J3住では、本文記載はないが、写真を見ると、図面上の下顎骨周辺に深鉢上半部が逆位、その傍らに大形破片、大腿骨の間におそらく土器口縁部が正位で写っている。他に、草刈貝塚B区216住〔E1〕では、人骨から一五〇cm離れて完形の深鉢（縄文のみ）が横位で出土している。

後期では、記録が不十分だが、大山史前学研究所が発掘した加曾利南貝塚の住居床面出土人骨の腰の部分に注口土器が置かれていた例がある。また、宮本台貝塚1住でも位置や遺存状況が不明ながら、二体の人骨が出土した床面からイノシシの頭骨とともに注口土器が出土している。いずれも堀之内2式である。後期前葉〜中葉の西関東〜中部でも注口土器の床面出土例が

知られており（須原二〇〇三、中村二〇一三）、関連する可能性がある。

イノシシの供獻

中峠貝塚3次1住1号人骨〔E2〕の頭部からイノシシの下顎骨、市谷加賀町二丁目遺跡3住〔E2〕では、覆土中から集積状態で検出された8号墓・10号墓に近接してイノシシの頭蓋骨・下顎骨・中手骨が検出されている。北川貝塚J51号住居址〔E2〕では、床面の人骨に近接してマウンド状に堆積している貝層中からイノシシ頭骨が出土している⁽⁸⁾。

これらは、頭骨を少数検出した例だが、草刈貝塚B区516住〔E1〕では三三三体のイノシシ骨破片が出土しており、祖先との共食が推定されている（高橋二〇〇四）。

(四) 赤色顔料

中峠貝塚5次1住〔E2〕床面付近で検出された4号人骨には「左足に接して「朱」と思われるものや貝殻が一個検出された」という。前述した曾谷貝塚E4住〔堀1〕では、人骨周囲に「微量のベンガラと推定される赤い粉」が検出されている。

(五) 土器の被覆

完形または土器の一部で遺体を覆う葬法は土器被覆葬あるいは甕被葬などと呼ばれ(中村二〇一三)、同時期の関東西部の墓坑でも見られる(山本二〇〇三)。廃屋墓の例では、人骨の頭部に倒置されるものが一例と多いが、高根木戸26住〔E2〕は胸部に大形破片、草刈貝塚B区195住〔E1〕では、人骨頭部に底部欠損の土器、胸部に大形破片を用い、加曽利南貝塚16住〔堀1〕では頭部・胸部付近に土器片が密集していた。

頭部を覆うもののうち完形品は中峠貝塚3次1住2号人骨・菱名B1住・草刈貝塚B区511住のみであり、底部または胴下半以下を打ち欠いたものを用いることが多い。蔵立貝塚4住例は口縁部を欠く。なお、姥山貝塚M7住〔E2〕の41号人骨は、下半部を欠く土器に覆われた頭骨のみが遺存していた。

また、姥山貝塚A6住では、幼児骨を大形破片が覆っていた。このほか、床下の墓坑検出の小児骨を土器で覆った例として殿平賀貝塚例〔堀〕があり、堀越正行(一九七六)によって「抱甕葬」と命名されている。

矢作貝塚では、合葬された七体中三体の胴部に土器が置かれていたが、堀之内1式と2式という型式差が存在する。土器ではないが、副葬の項で触れた、祇園貝塚の土錘・石錘を報告者は魚網の被覆と推定している。

(六) 遺体の放置

遺体の姿勢を検討する上で、周囲に隙間のある「空隙環境(奈良二〇〇七、青野二〇一〇)」にあったのか、土で覆われた「充填環境」にあったかは、墓の景観を検討する上で重要である。古く、土器を伴う矢作貝塚の人骨の不自然な移動についての考察がある。

渡辺新(二〇〇六a)は姥山貝塚B9住例について、五体全てが解剖学的位置を保っていないとした上で、いずれも「葬の姿勢」が時間経過とともに移動したものと理解した。遺体が固い褐色土で覆われたのは死後一定期間を経たこととから、その時点での腐敗・白骨化の進行状況に差がある、つまり死亡時期に差があったと解釈した。この所見については佐宗亜以子(佐宗・諏訪二〇一二)からいくつかの誤認が指摘されているが、渡辺は有吉北貝塚SK095小竪穴墓

においても、人骨が解剖学的位置を保っていないもの
の死体現象以外の人・動物の営為が認められないこと
から、空隙環境での一定期間の厳密な管理の後に、土・
貝を埋めたとしており、死後直ちに土で被覆しない葬
法の存在を主張している。一方、花輪宏（一九九五）
は自然位を保たない人骨の存在を根拠に、白骨化まで
に動物の出入りのあったことを想定している。

市谷加賀町二丁目遺跡3住1・2号人骨は、頭部・頸
椎が転落しており、空隙環境にあったことが指摘され
ている。顔を覆って倒置されていたであろう深鉢も
横転しているが、頸部以下は自然位を保っているので、
報告書の総括において阿部芳郎は、土器を被せた頭部
以外の部分に土を盛った葬法を想定している（図2）。
後期の大膳野南貝塚では、J18号住居址・J74
号住居址1・2号人骨の一部が移動しており空隙環境
または覆土が薄かったものと推定されている（澤田ほ
か二〇一四）

なお、市谷加賀町二丁目遺跡（中期）後期一五体中
一二体）、草刈貝塚（中期二体のみ）、大膳野南貝塚（後
期一九体中一五体）などで齧歯類の噛み痕が確認され

ている。これを空隙環境にあった証拠とみる見解があ
り（澤田ほか二〇一四）、時期的な差異や、確実に埋
葬されていたと想定される事例での出現率などを体系
的に検討することで、さらにこの問題に迫りえる可能
性がある。

（七）遺体の一部取り去り・移動

子和清水貝塚六二年住〔E1〕で出土した二体の人
骨のうち1号は頭骨全体・頸椎、2号は下顎骨が残る
一方、頭蓋骨・第一頸椎が存在しない。1号について
は軟部組織のある段階での切除を示唆する。一方、根
郷貝塚J4住〔E1〕の7号人骨は下顎骨の遺存に比
して頭蓋骨の保存状態が極端に悪いとされており、一
部除去の可能性が指摘されている（山田二〇〇¹⁰）。
除去は白骨化後であろう。有吉北貝塚096住のA人
骨〔E1〕は、隣接する097住下層出土の七片のう
ち左脛骨が接合したほか、接合しない右脛骨破片、頭
蓋骨破片も同一人物のものであり、白骨後の取り扱
いの可能性が指摘されている。向台貝塚38住の18号
人骨〔E2〕は、右大腿骨のみ40cm離れた穴から出
土している。

後期の例では、加曾利南貝塚2・1住の10号人骨は、頭部が胴部から約20cm離れて検出されている。覆土の攪乱は認められないとされており、右大腿骨の一部が損傷していることも含め、何らかの移動が想定できる(図2)。

(八) 改葬

前項と関連するが、廃屋墓出土人骨には、自然位および空隙環境下での移動とは異なる、散乱骨・部分骨も存在するので、白骨化後の改葬行為も行われていたことになる。中峠貝塚5次1住では九体中八体が改葬骨と考えられており、同10次調査で褐色土が掘り込まれていた例のあることから、他の住居を掘り返して遺体を回収後、別の住居に再埋葬した可能性が指摘されている(図6)。姥山貝塚M7住や祇園貝塚3住の頭骨も改葬例であろう。

(九) 土などの被覆・盛り上げ

マウンドの形成

姥山貝塚では、A2住で人骨が「黒褐色土の上に置かれ、略同様なる土に蔽はれて小円墳を呈し、B堆積貝層の貝殻僅かにこれを蔽ひしもの」という状態で、

またA7住では人骨が「床上一五糶の高さに在り、上に黒色土を以て高さ約八〇糶程の土饅頭を築きたるもの、如く、更にこれを赤土で薄く蔽へるも、足方に於てはこれを欠き、又上部は処々陥没せるが如き様を呈せり」という状態で検出されている。共に、一体のみの検出であり、A7住では人骨全体を覆うものではないことから、後述の複数の人骨または住居全体を覆って形成されるものとは区別してここで紹介する。

ロームブロック・灰の被覆

これらとは別に、中峠貝塚3次1住では、3号人骨下腹部や5号人骨の右肘上や腰・膝の右脇にロームブロックが置かれていた。5号人骨はさらに、遺体の頭から足先までを覆うように灰(報告では灰混じりの二枚貝層)が広がっていたらしい(大村二〇〇九)。

四、遺体群・竪穴全体に関する行為

(一) 合葬・追葬

前述したように勝坂式期〜加曾利E1式期を中心に、一軒の竪穴から複数体の人骨が検出される例がある。ここで問題となるのは、これら複数の遺体が同時

に葬られたのか（同時合葬）、時期差があるのか（時間差合葬＝追葬）かという問題である¹¹。

姥山貝塚B9住や加曾利北貝塚II29住など、床面に複数の遺体が置かれているもののうち、一見すると乱雑な配置のものについては、中毒死などによる同時死亡・放置が想定されてきた（大塚一九六七・一九六七、春成一九八一など）。しかし、その後、姥山例については、時間差と葬送の存在が指摘されており、根郷J5住も同様のものと見られるようになってきている（土井一九八五、佐々木一九八六、花輪一九九九、渡辺二〇〇六aなど）。一方、上屋の存在を前提に、高橋龍三郎（二〇〇七）は、草刈貝塚や根郷貝塚の複数埋葬例について、順次埋葬されたものとし、姥山例について渡辺新（二〇〇六a）は当初から死体収容専用構築されたものと解釈しているが、佐々木藤雄（二〇一一）による批判がある。

具体的に順序を検討できるのは、遺体が重なっている場合と、覆土との関係が明瞭なものに限られる。但し、前者の場合、順序がわかったとしても期間を検討することは難しい¹²。後者については、根郷例で、床面

に近い2〜6号からやや離れた1号人骨のみが床上約一〇cmのレベルから出土している。また、比較的整然とした配置をとり、計画性が指摘されているもの（高橋一九九一、花輪一九九五）のうち、草刈貝塚B516住は、床面内外に段差を持つ有段式であるが、東・南の内側床上にC・D人骨、内側の床面がやや埋まった段階で西側の外側床面にA人骨、さらに覆土が堆積した段階で北側のB人骨が置かれており、順序が判明する（図5）。中峠貝塚3次1住でも第一次埋没土中の1・3・4号が南側に、上部貝層中の2号が北西に位置する。

（二） 焚火

人骨の近くで火が焚かれたことについては、小金井良精（一九二三）や清野謙次（一九四六）が宮城県宮戸島貝塚での人骨直下の灰炭や、岡山県津雲貝塚、熊本県阿高貝塚などでの人骨の一部が焼けている例を注意している。その後、僅かに言及があるものの（酒詰一九六二）、本格的検討は行われていない。

加曾利北貝塚29住〔E1〕では、床上に四体の人骨が検出されているが、「混土貝層の上面において、

その床面全体を覆うように、灰と焼土の広がり直径約3mの範囲にわたって確認された」とあり、7号人骨の頭部と胸骨の一部にかなりの炭化が認められている。複数人の埋葬・貝層堆積後に火を放ったこととなる。小竪穴であるが、姥山貝塚B地点3住（時期不明）から検出された2号人骨は「腹部ノ上ニテ火ヲ焚キタル形跡歴然タル事ニシテ、灰、木炭屑、焼土ノ集合セルヲ認ム。但シ、之ニ附接触セル部分ノ骨ハ焼ケタル痕跡ナシ」と報告されている。

他地域・他時期の廢屋墓の事例として前期の千葉県幸田貝塚三八号住居で頭部から胸部にかけて強い火を受けた人骨、後期の長野県大横道上遺跡で焼失住居内人骨、愛知県林ノ峰貝塚で火を受けた人骨の検出例がある（山本一九八五）。

(三) イヌの埋葬

草刈貝塚H区489住〔勝〕では、前述の通り墓坑が構築されているが、すぐ上の貝層上からイヌ骨が検出されている（図3）。菱名貝塚B1住〔E1〕では床面からイヌ一体、その三〇cm程上面から人骨が検出されている。その間の土層の状況が不明なので、両者

の関係性は検討できない。高根木戸遺跡2住〔E1〕でも覆土中から二体の人骨が出土している。下の床面でもイヌの埋葬がある。

(四) 土・ロームブロックの被覆

姥山貝塚B9住の報告には、「五体ハ竪穴床面ニ接シ、其上ニ褐色ナル硬キ土ヲ被リシ為、保存状態ハ中等度ナリシモ採集ニ困難ヲ感ジタリ」と記載されており、ローム質土の被覆があったことが想定されているが、その範囲は不明である。中峠貝塚では、人骨の部分だけでなく竪穴全体を覆うものであったことが明らかにされている（3次1・2住、5次1住）。

(五) 貝層の被覆・堆積

貝層の被覆

竪穴内の貝層については、加曾利北貝塚の報告書が指摘するように「人骨の埋葬された部分だけを貝殻で覆ったのか、貝殻で覆われた部分の人骨だけが残ったのかは判然としない」（実倉一九七二）。しかし、廢屋墓に限らず、人骨の遺存を貝の被覆による人為的な結果とみる見解も少なくない（河野一九三五、西村一九六五、前田一九八三など）。高梨友子（一九九八）は、

間層を挟まず貝層が直接人骨を覆うもの、平面分布が人骨と重なるもの、人骨の周りにイボキサゴが堆積するものを挙げ、縄文人の意図的な所産と論じている。

廃屋墓の多くは、一次埋没土を覆うように貝層が堆積しているが、それとは異なつた特徴的な貝層の例をみてみたい。

前述の通り右大腿骨が離れて見つかった向台貝塚38住の18号人骨は、「遺体の上に10cm位土が覆い、更にその上部が広く貝殻で覆われていた」が、この遺跡でこうした例は他にみられないと指摘されている。有吉北貝塚SB175では、壁際に近い位置に人骨が置かれ、人骨から炉までの間に混土貝層が低く盛られている。人骨の傍らには灰が集中する箇所がある。

有吉南貝塚354住、廿五里南貝塚例では、墓坑中の人骨の周囲にイボキサゴが充満していた。

後期の例では、大膳野南貝塚のJ18・67・74号住居址で多量のイボキサゴ・ハマグリで覆われていたとされる。

貝層のマウンド状堆積

九体分の人骨（上部貝層中への改葬を含む）が検出

された中峠貝塚5次1住では、上部貝層（Ⅱ～Ⅳ層）がマウンド状に堆積しており、意図的なものと報告されている（図6）。一方、中峠貝塚3次2住では、人骨を覆うように、住居中央部にマウンド状に貝層が堆積していたが、貝層上層・中層には加曽利E3式土器を含んでいたため人骨の時期である加曽利E1式期との時間差が指摘されており、詳細な層位区分と出土遺物の検討の必要性を喚起している。

寒風遺跡1住でも、炉や墓坑を含む住居中央部に混土貝層が堆積し、墓坑内まで達している。断面図を参照すると、低いながらもマウンド状に堆積している（図4）。北川貝塚J51住（E2）では、床面上に人骨二体分が埋葬された、混土貝層・純貝層がマウンド状に点在して堆積している。千駄木遺跡C地点J3（中期）でも、床面に2号人骨、床面上約20cmの混貝土層中から1号人骨が検出されており、やはり、貝層は住居の中央部分に点在する。1号人骨は、石囲炉に足がかかるように置かれているが、解剖学的配列は著しく乱れているので、二次葬の可能性がある。

特徴的な覆土がマウンド状に形成される事例は、北

海道野田生1遺跡(後期中葉)、岩手県細谷地遺跡(晩期前葉)においても確認されており、それぞれ特徴的な土器などの出土状況と合わせて廃屋墓の可能性が指摘されている(北海道埋蔵文化財センター編二〇〇三、金子二〇〇八)。

(六) 竪穴の重複

重複関係を検討できた中期の廃屋墓七八軒中明瞭に他の住居が重複しているのは以下にあげる例のほかは六軒にすぎない。重複を避けた結果と解釈し得るかは、廃屋墓以外を含めた検討が必要であるが、草刈貝塚B区では、廃屋墓同士の重複(207B・C〔E1〕、543・509〔E3〕)が見られるが、この遺跡では全体として重複の激しいエリア(高橋によるI・II・IV)とそうでないエリア(III・V)があり、廃屋墓の重複もI・IVで認められる。廃屋墓同士の切り合いは根郷貝塚3住・4住〔E1〕にもみられる。

五、小 結—さらなる葬送行爲の復元に向けて—

以上、廃屋墓で行われた様々な行爲の記録をできる限り集成してきた。これらは、複数の時期の別々の廃

屋墓で注意された事象を寄せ集めたに過ぎず、一連の式次第に従ったものとは考えられない。そもそも、全てが葬送儀礼の所産か否かも検討を要する。

こうした諸行爲の痕跡については、縄文時代の葬制研究の初期においては注目を集め、集成されたもの(小金井一九二三、清野一九四六、大塚一九六七など)、「太陽崇拜」・「他界観念」といった民族学的説明が持ち込まれたこともあり、その後の埋葬区・頭位・抜歯・装身具などから社会構造を読み取るうとする研究の隆盛に従い、影を潜めてきた経緯がある。

確かに、これら行爲の宗教的意味を復元することは極めて困難である。しかし、ある行爲の痕跡が「再現・反復されたパターン」として認定し得れば、当時において社会的に認められた行爲と理解でき(谷口二〇〇八)、例えばそれを社会複雑化や地域差を示す指標として検討することが可能である。また、今回の整理では複数人埋葬という点を除けば、廃屋墓に特有の葬送行爲が認められなかったが、この結果は廃屋墓研究の課題を浮かび上がらせることにつながる。

一方、葬送のプロセスという観点も重要である。古

墳時代や弥生時代の葬送プロセス研究(和田二〇一四、溝口一九九八、立花二〇〇五など)では、その場の景観や参列者の動作・視線まで論が及んでおり、より立体的・複合的な視野で儀礼の社会的意義を検討している。縄文時代においても葬送儀礼は本来多様な行為が連続して行われたものと推察されるが、縄文時代の墓は比較的単純ものが多く、葬送のプロセスを追えるのは、青野友哉(二〇一二)による北海道の合葬墓の検討など僅かである。この点、人骨・有機質遺物を遺存し、¹⁴⁾まな埋葬のタイミングを有する廃屋墓は、葬送の複雑性を検討する格好の素材となるはずである。

本稿は、廃屋墓研究の定点となる諸行為の整理を目指したが、事例数は十分とは言えない。複雑で豊かな葬送文化を復元するためにも、こうした事象の観察記録とパターンの検討はさらに進めていくべきである。

最後に今回の成果をまとめておく。

- ①墓坑の有無にかかわらず、遺体を安置する前に下面を整備する例がある。
- ②埋葬姿勢は中期には屈葬が多く、伸展葬は二割程度

であるが、後期には七割を超える。

- ③鯨類骨製腰飾など重要な着製品を持つ例は廃屋墓の男性骨に多いが、玉類などは検出されない。耳栓・貝輪などを伴う例は女性骨に多い。

- ④土器の副葬は少なく、石器の副葬は現状では見られない。装身具以外の有機質の道具類の副葬も認められない。

- ⑤一例のみだが、赤色顔料を用いる例がある。

- ⑥土器で顔ないし胴部を被覆するもの、ロームブロックを置くもの、貝や灰で覆うもの、土でマウンド状に被覆するものがあり、市谷加賀町二丁目遺跡ではその複合が想定される。

- ⑦死後すぐに密閉されず、遺体の変形の変形により自然位を保たない例がある。被覆の程度による可能性がある。

- ⑧頭部や四肢の一部を白骨化前または後に部分的に取り除いた可能性のある例がある。

- ⑨遺体を掘り起こして、他者が葬られている廃屋墓の上層に改葬する例があり、後期の再葬合葬墓との関連をうかがわせる。

⑩特定の被葬者との関係は不明だが、イヌの埋葬、イノシシの供献、焚火などの行為が行われる場合がある。

⑪複数の遺体を伴う廃屋墓の中央部分を中心に、ロームブロックを混在する土層や貝層など厚く被覆する場合があり、貝層の場合、マウンド状を呈することがある。

⑫廃屋墓が他の竪穴に切られることは少ないが、廃屋墓同士の場合を中心に若干の事例がある。

本稿は日本学術振興会学術研究助成基金助成金若手研究B「出土状況・セツト関係にみる縄文時代中期の儀礼行為に関する基礎的研究」の成果の一部である。

注

(1) 谷口康浩(二〇〇七)は、縄文時代における死者(祖先)重視の例として、環状集落中央墓域とともに廃屋墓の存在を挙げている。

(2) 研究の早い段階で、「廃屋を利用して墓地とした」と言及した大場磐雄(一九三四)は洞窟を含めた。

縄文時代の葬墓制を類型化して初めて「廃屋墓」の名を提示した坂詰秀一(一九六一)は洞窟内や床下の土器棺を含めていたが、この二者はその後に「廃屋墓」から外されることとなる。床下の墓坑を含む場合、床面に限る場合(大塚一九六八)などがあり、「家屋墓」(斉藤一九七八)、「屋内葬」(花輪一九九五)などとも呼ばれるように、その範囲・呼称自体が研究の主要な論点となってきた経緯がある。海外の民族誌事例では、居住中の事例を含めて家屋墓・屋内墓などと呼ぶ場合があるが、今回は除外しておく。

(3) 北海道美々5遺跡(前期)二体、青森県最花貝塚(中期)二体、青森県松ヶ崎遺跡(中期)一体、岩手県上村貝塚(中期)一基六体、岩手県貝島貝塚(晩期)二体、埼玉県黒谷貝塚(前期)一体、埼玉県水子貝塚(前期)一体、埼玉県打越貝塚(前期)一体、八丈島倉輪遺跡(中期)一体、長野県北村遺跡(後期)一体、愛知県林ノ峰貝塚(後期)一体、静岡県蜷塚貝塚(晩期)二体、大分県棒垣遺跡(後期)三體。

(4) 「行為」への注目は、儀礼研究の前段階として、対象遺構・遺物への具体的行為やコンテクスト(出土

- 状況)を一つずつ検討することの重要性を強調する谷口康浩(二〇〇八・二〇一二)の姿勢に従うものである。
- (5) 東京湾東岸域の墓制全般の傾向については、加藤暁子(一九九九)の検討がある。また、今回検討した廃屋墓について、層位差を区別せずに複数埋葬の例数を挙げると以下の通りである、(勝・E1)・二体七例、三〜五体各二例、六体三例、七体一例、(E2・4)・二体九例、三体五例、四体二例、七・八体各一例、(後期)・二・三・七体各二例、四・五体各一例。
- (6) 便宜上、加曾利E1式古段階(中峠式を含む)の直前を含んで一括しておく。また、加曾利E式の区分呼称は論者によって異なるが、ここでは黒尾編年(一九九五)に従う。なお、報告書において「加曾利EⅡ式」とされたもののうち、図面や写真で確認できないものについては、加曾利E2・3式期とし、表中ではその他中期に合算している。
- (7) 研究史上、「放置」とされたもののうち、屈葬とは判断できないものを判断保留とした。
- (8) 廃屋墓ではないが、草刈貝塚(千葉急行線)では一次埋没土上にイノシシ頭骨が置かれ、その上部に焼土層が堆積していた(田井一九八三)。
- (9) 廃屋墓以外を含めた人骨に伴う土器被覆葬事例のうち、頭部については山田康弘(一九九二)、「抱甕葬」については、宇田川浩一(一九九三)の検討がある。
- (10) 山田は、縄文人骨全般における頭部への特別な取り扱いについて検討している。
- (11) 各人の関係性については、同時死亡Ⅱ家族を前提とした研究(塚田一九六六、春成一九八一)のほか、人骨形態(佐宗・諏訪二〇一二)・歯冠計測(近藤二〇〇八)・頭蓋小変異(山田一九九五)などの検討がある。
- (12) 渡辺新(二〇〇六a)は、姥山例について、白骨化に伴う骨の移動の状況から、最終的に遺体群がローム質土で覆われるまでの間の経過期間が異なっていたとみて、法医学の所見をもとに約八年半の時間差を想定した。また、中峠貝塚5次1住の人骨のうち、床面に近接する2d号と上部貝層から改葬状態で検出された1d号の歯牙形態の類似から、両者を一卵

性双生児とし、1a号が完全に白骨化する前の段階でこの場所に固定されたことを指摘した上で、2d号の推定死亡年齢五〜六歳、1a号の推定死亡年齢一五〜一六歳、1a号白骨化までの年数最大六年をもとに、両者の最終的な埋葬時期の時間幅を最大一六年と見積もっている(二〇〇六b)。

(13) 住居の項目では、直径4mと記載される。

(14) これらのうち、山本暉久(一九八五)や堀越正行(一九八六)の集成研究以降に調査されたものは、市谷加賀町二丁目遺跡、大膳野南貝塚などに限られ、中峠貝塚などを除き、今回検討した諸事象について、図や写真が示されたものは僅かである。今後の各地での比較検討のためにも、客観的記録の提示が期待される。

引用文献

青野友哉 二〇一二 「縄文後期における多数合葬墓の埋葬過程―北海道カリンバ遺跡を中心に―」『考古学研究』

第五九卷第三号

青野友哉 二〇一〇 「人骨の出土状況による遺体周辺の

環境判断と方法的妥当性について」*Anthropological science* [Japanese series 118(1)]

犬塚敏雄 一九九五 「根郷貝塚第一次調査人骨の出土状態について」『鎌ヶ谷市史研究』第八号

宇田川浩一 一九九三 「房総半島における縄文時代埋葬様式の変化について―特に中期から後期へ―」『法政考古学』二〇

関間俊明 一九九五 「竪穴住居の覆土形成に関する一考察(I)―焼失住居とされる目黒区大橋遺跡S J91号住居跡例をもとに―」『東京考古』第一三三号

江森正義 一九九一 「住居址覆土の堆積過程に関する覚書―過去の発掘に対する反省をこめて―」『下総考古学』第一二二号

大塚和義 一九六七 「縄文時代の葬制」『史苑』第二七卷第三号

大塚和義 一九六八 「縄文時代の埋葬」『歴史教育』第一六卷第四号

大場磐雄 一九三四 『日本考古学概説』日東書院

大場磐雄 一九五五 「主要縄文式竪穴の考察」『平出朝日新聞社

- 大村 裕 二〇〇九 「中村紀男氏と千葉県松戸市中峠遺跡第3次調査―千葉県松戸市中峠遺跡第3次調査報告」『下総考古学』14号(1995年)の補遺として―
- 『野州考古学論攷』中村紀男先生追悼論集刊行会
- 金子昭彦 二〇〇八 「東北北部における縄文晩期の廃屋墓―岩手県盛岡市細谷地遺跡の事例から―」『縄文時代』第一九号
- 清野謙次 一九四六 『日本民族生成論』日本評論社
- 榎原功一 二〇〇五 「廃屋墓・土坑墓にみる縄文人の空間認識」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』一四
- 黒尾和久 一九八八 「堅穴住居出土遺物の一般的あり方について」『古代集落の諸問題』玉口時雄先生古稀記念事業会
- 黒尾和久 一九九五 「縄文中期集落遺跡の基礎的検討(一)」『論集宇津木台』第一集
- 河野広道 一九三五 「貝塚人骨の謎とアイヌのイオマンテ」『人類学雑誌』第五〇巻第四号
- 小金井良精 一九二三 「日本石器時代人の埋葬形態」『人類学雑誌』第三八巻第一号
- 小林謙一 二〇二二 「縄紋時代堅穴住居跡埋没過程の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一七二集
- 小林達雄 一九六五 「遺物埋没状態及びそれに派生する問題(土器廃絶処分の問題)」『米島貝塚』庄和町教育委員会
- 近藤 修 二〇〇八 「市川市縄文貝塚人の形質―歯牙計測値による個体間、遺跡間分析―」『市川市縄文貝塚データベース』市立市川考古博物館
- 斉藤 忠 一九七八 「家屋墓」「墳墓」近藤出版社
- 酒詰伸男 一九六二 「本邦遠古の埋葬について(概説)」『文化史研究』一四
- 坂詰秀一 一九五九 「縄文文化における特殊葬法について」『歴史教育』第七卷第三号
- 坂詰秀一 一九六一 「日本石器時代墳墓の類型的研究」『日本考古学研究』
- 佐々木藤雄 一九八六 「縄文時代の家族構成とその性格―姥山遺跡B9号住居址内遺棄人骨資料の再評価を中心として―」『異貌』第一二号
- 佐々木藤雄 二〇一一 「縄文時代の二つの死者の家―廃屋墓と埋葬専用家屋―」『異貌』第二九号
- 佐宗亜以子・諏訪元 二〇二二 「骨形態の分析とその留

- 意点―姥山貝塚B9号住居址人骨の血縁関係推定を中
心にして―『月刊考古学ジャーナル』第六三〇号
- 澤田純明・佐伯史子・鈴木敏彦・篠田謙一 二〇一四 「大
膳野南貝塚出土人骨の形態学的報告」『千葉市大膳野南
貝塚発掘調査報告』
- 宍倉昭一郎 一九七一 「人骨の出土状態」『加曾利貝塚
I』中央公論美術出版
- 篠田謙一・安達登 二〇一一 「草刈貝塚出土人骨のDN
A分析(予報)」『市原市草刈遺跡(I区)』千葉県教育
振興財団
- 末木 健 一九七五 「移動としての吹上パターン」『山
梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩
郡長坂・明野・韭崎地内―』山梨県教育委員会
- 鈴木保彦 二〇一〇 「関東地方の縄文集落の葬墓制」『シ
リーズ縄文集落の多様性Ⅱ 葬墓制』雄山閣
- 清藤一順 一九七七 「縄文時代集落の成立と展開―国分
谷周辺区域における前期・中期を中心として―」『千葉
県文化財センター研究紀要』2
- 田井知二 一九八三 「千葉急行線内草刈貝塚で発見され
たイノシシ頭骨と焼土堆積遺構について」『研究連絡誌』
- 六
- 高橋龍三郎 一九九一 「縄文時代の葬制」『原始・古代
日本の墓制』同成社
- 高橋龍三郎 二〇〇四 『縄文時代研究の最前線』早稲田
大学文学部
- 高橋龍三郎 二〇〇七 「関東地方中期の廃屋墓」『縄文
時代の考古学九 死と弔い―葬制―』同成社
- 立花 実 二〇〇五 「方形周溝墓の埋まり方と祭祀の段
階」『季刊考古学』第九二号
- 谷口康浩 一九九八 「縄文時代集落論の争点」『國學院
大學考古学資料館紀要』第一四号
- 谷口康浩 二〇〇七 「祖先祭祀」『縄文時代の考古学―
一 心と信仰』同成社
- 谷口康浩 二〇〇八 「総論・コードとしての祭祀・儀礼
―行為の再現性と反復性―」『月刊考古学ジャーナル』
五七八
- 谷口康浩 二〇〇九 「縄文時代の生活空間―『集落論』
から『景観の考古学』へ」『縄文時代の考古学八 生活
空間―集落と遺跡群―』同成社
- 谷口康浩 二〇一二 「祭祀考古学は成り立つか―方法論

- 研究の必要性―『祭祀儀礼と景観の考古学』國學院大學
 學伝統文化リサーチセンター
- 塚田 光 一九六六 「縄文時代の共同体」『歴史教育』
 第一四卷第三号
- 土井義夫(と) 署名) 一九八五 「同人言」『物質文化』
 第四四号
- 中村耕作 二〇一〇 「住居廃絶儀礼における縄文土器」
 『椋山林継先生古稀記念論集 日本基層文化論叢』雄山
 閣
- 中村耕作 二〇一〇 「岩手県における縄文時代中期後半
 の住居床面出土土器」『平成二二年度一戸町文化財年報』
- 中村耕作 二〇一三 「縄文土器の儀礼利用と象徴操作」
 アム・プロモーション
- 中村耕作 二〇一五 a 「縄文時代中期における住居床面
 ／墓坑内の倒置土器」『日本考古学協会第八一回総会研
 究発表要旨』
- 中村耕作 二〇一五 b 「縄文人のお供え物―沖ノ原遺跡
 のクッキー状炭化物をめぐる―」『津南学』四、ほお
 ずき書房
- 中村耕作 二〇一五 c 「儀礼の場としての堅穴」『函館市
 縄文文化特別研究成果報告書
 奈良貴史 二〇〇七 「近世考古学と形質人類学」『近世・
 近現代考古学入門』慶応義塾大学出版会
- 西村正衛 一九六五 「埋葬」『日本の考古学Ⅱ 縄文時
 代』河出書房
- 花輪 宏 一九九五 「屋内葬考―類型と性格―」『考古
 学研究』第四二卷第一号
- 花輪 宏 一九九九 「縄文時代墓制研究への一視点」『奈
 和』第三七号
- 林 謙作 一九八〇 「東日本縄文期墓制の変遷(予察)」
 『人類学雑誌』第八八卷第三号
- 春成秀爾 一九八一 「縄文時代の複婚制について」『考
 古学雑誌』第六七卷第四号
- 平林 彰 一九九四 「廃屋墓」『縄文時代研究事典』東
 京堂出版
- 北海道埋蔵文化財センター編 二〇〇三 『野田生Ⅰ遺
 跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第一八三集
- 堀越正行 一九七一 「加曾利E期の世界観(Ⅱ)」『貝塚
 博物館紀要』四号
- 堀越正行 一九七六 「殿平賀の抱甕葬」『史館』第六号

- 堀越正行 一九八六 「京葉における縄文中期埋葬の検討」『史館』第一九号
- 堀越正行 一九九一 「貝の花集落の埋葬」『史館』第二三号
- 堀越正行 一九九七 「船橋市宮本台貝塚の埋葬」『史館』第二九号
- 堀越正行 二〇〇五 「縄文の社会構造をのぞく 姥山貝塚」新泉社
- 堀越正行 二〇〇六 「姥山の五人―住居床面葬の検討―」『新尖石縄文考古館開館五周年記念 考古論文集』茅野市尖石縄文考古館
- 堀越正行 二〇一三 「廃屋墓」『事典墓の考古学』吉川弘文館
- 前田 潮 一九八三 「貝塚にみる縄文人の精神生活」『歴史公論』第九四号
- 溝口孝司 一九九八 「墓前のまつり」『日本の信仰遺跡』雄山閣出版
- 山田康弘 一九九五 「多数合葬例の意義―縄文時代の関東地方を中心に―」『考古学研究』第四二卷第二号
- 山田康弘 二〇〇一 「縄文人骨の装身具・副葬品の保有状況と土坑長」『物質文化』第七〇号
- 山田康弘 二〇〇一 「縄文時代における人骨頭部の取り扱い方」『情報祭祀考古』第二〇号
- 山田康弘 二〇〇二 「人骨出土例の検討による縄文時代墓制の基礎的研究」平成一二・一三年度科学研究費補助金(奨励研究(A))研究成果報告書
- 山本暉久 一九七六 「住居跡内に倒置された深鉢形土器について」『神奈川考古』第一号
- 山本暉久 一九八五 「縄文時代の廃屋葬」『古代』第八〇号
- 山本暉久 一九八七 「縄文中期における住居址内一括遺存土器群の性格」『神奈川考古』第三号
- 山本暉久 一九九一 「環状集落址と墓域」『古代探叢Ⅲ』早稲田大学出版部
- 山本暉久 一九九三 「縄文時代における竪穴住居の廃絶と出土遺物の評価」『二十一世紀への考古学』雄山閣出版
- 山本暉久 二〇〇三 「墓壇内に倒置された土器」『神奈川考古』第三九号
- 山本暉久 二〇一五 a 「廃屋墓」『季刊考古学』第一三

- 号
- 山本暉久 二〇一五b 「廃屋墓葬をめぐる研究動向について」『縄文時代』第二六号
- 四柳 隆 二〇一二 「いわゆる「廃屋墓」に関する考察（その1）―千葉県内の堅穴住居址から出土した縄文時代人骨分析から―」『考古学論叢』六一書房
- 米田 穰 二〇〇八 「同位体分析でみた市川の縄文人の食生活」『市川市縄文貝塚データブック』市立市川考古博物館
- 米田 穰 二〇一一 「草刈貝塚から出土した縄文時代・古墳時代人骨の同位体分析」『市原市草刈遺跡（I区）』千葉県教育振興財団
- 和田晴吾 二〇一四 「古墳時代の葬制と他界観」吉川弘文館
- 渡辺 新 一九九四 『多数人骨集積の類例追加と雑感』（自費出版）
- 渡辺 新 二〇〇六a 「―市川市姥山貝塚接続溝第一号 堅穴―五人の死体検案」『千葉縄文研究』一
- 渡辺 新 二〇〇六b 「中峠遺跡第5次発掘調査人骨―その出土状態と歯の形質―」『下総考古学』一九
- 渡辺新・西野雅人 二〇〇六 「骨角貝製「腰飾」―篋状・鯨類下顎骨製品・環状イモガイ製品―」『千葉縄文研究』一
- 事例典拠
- 我孫子市教育委員会編 一九七九 『鹿島前遺跡第一次発掘調査概報』
- 市川市史編纂委員会 一九七一 『市川市史 第一卷』（姥山貝塚M地点・向台）
- 市原市文化財センター編 一九八七 『千葉県市原市菊間手永遺跡』市原市文化財センター調査報告書第二三集
- 市原市文化財センター編 一九九五 『市原市能満上小貝塚』市原市文化財センター調査報告書第五五集
- 市原市文化財センター編 一九九九 『千葉県市原市祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告書五
- 大山柏・池上啓介・大給尹 一九三七 『千葉県千葉郡都村加曾利貝塚調査報告』『史前学雑誌』第九卷第一号
- 大田区教育委員会編 一九九七 『大田区の縄文貝塚』（千鳥久保貝塚）
- 上総国分寺台遺跡調査団編 一九七七 『西広貝塚』上総

- 国分寺台遺跡調査報告三 早稲田大学出版部
 祇園貝塚調査団編 一九七〇 『祇園貝塚 発掘調査概要』
 子と清水加塚発掘調査団 一九七六・七八 『子と清水貝塚 遺構図版編』・『同 遺物図版編Ⅰ』
 国際文化財株式会社・玉川文化財研究所共同企業体編
 二〇一四 『千葉市大膳野南貝塚発掘調査報告』
 後藤和民・庄司克 一九八一 「昭和四七年度加曾利南貝塚南側平端部第四次遺跡限界確認調査概報」『貝塚博物館紀要』第七号
 佐野大和・西田泰民編 一九九四 『横浜市金沢区青ヶ台貝塚発掘調査概報』
 下総考古学研究会 一九七六 「中峠貝塚発掘調査概要」『下総考古学』六
 下総考古学研究会 一九九五 「千葉県松戸市中峠遺跡第三次調査報告」『下総考古学』一四
 下総考古学研究会 一九九五 「千葉県松戸市中峠遺跡第四次調査報告」『下総考古学』一六
 下総考古学研究会 二〇〇六 「千葉県松戸市中峠遺跡第五次調査報告」『下総考古学』一九
 新宿区地域文化部文化観光課文化資源係編 二〇一四
 『東京都新宿区市谷加賀町二丁目遺跡Ⅵ 縄文時代編』
 『同 埋葬遺構編』
 市立市川考古博物館編 『向台貝塚資料図譜』
 杉原莊介編 一九七六 『加曾利南貝塚』中央公論美術出版
 版
 杉原莊介編 一九七七 『加曾利北貝塚』中央公論美術出版
 版
 千駄木遺跡調査会編 一九八九 『千駄木遺跡』
 曾谷貝塚発掘調査団編 一九七八 『曾谷貝塚E地点発掘調査概報』
 高根木戸遺跡調査団 一九七一 『高根木戸』船橋市教育委員
 高橋良治・塚田光・小片保 一九六三 「千葉県子と清水貝塚発掘調査概報」『考古学雑誌』第四九卷第二号
 滝口宏編 一九七七 『加曾利貝塚Ⅳ』中央公論美術出版
 武田宗久 一九三八 「下総国矢作貝塚発掘報告」『考古学』第九卷第八号
 武田宗久編 一九六八 『加曾利貝塚Ⅰ』千葉市教育委員
 会
 塚田光 一九六五 「横浜市立盲学校校庭における縄文・

- 弥生時代の遺跡調査』『教育時報』八五（繩文時代の基礎研究）に再録）
- 千葉県教育振興財団編 二〇〇八 『千葉東南部ニュータウン四〇 千葉市有吉北貝塚』千葉県教育振興財団調査報告第六〇四集
- 千葉県教育振興財団編 二〇一一 『千原台ニュータウン26 市原市草刈遺跡（I区）』千葉県教育振興財団調査報告第六四七集
- 千葉県文化財センター編 一九七九 『千葉東南部ニュータウン七 木戸作遺跡第二次』
- 千葉県文化財センター編 一九八六 『千原台ニュータウンⅢ 草刈遺跡（B区）』
- 千葉県文化財センター編 一九九〇 『市原市草刈貝塚』
- 千葉県文化財センター調査報告第一七一集（千葉急行線内）
- 千葉県文化財センター編 一九九二 『千葉東南部ニュータウン一〇 小金沢貝塚』
- 千葉県文化財センター編 一九九八 『千葉東南部ニュータウン一九・二〇 有吉北貝塚』千葉県文化財センター調査報告第三二四集・第三二五集
- 千葉市史編纂委員会編 一九七四 『千葉市史 原史古代中世編』・『同資料編』（廿五里南貝塚・菱名貝塚・蕨立貝塚）
- 松村瞭・八幡一郎・小金井良精 一九三二 『下総姥山ニ於ケル石器時代遺跡 貝塚ト其ノ貝層下発見ノ住居址』東京帝国大学理学部人類学教室研究報告第五編（姥山貝塚B地点）
- 宮坂光次・八幡一郎 一九二七 『下総姥山貝塚調査予報』『人類学雑誌』第四二卷第一号（姥山貝塚A地点）
- 宮本台遺跡発掘調査団編 一九七四 『宮本台I』・『同II』船橋市教育委員会
- 村上俊嗣 一九六七 『松戸市殿平賀貝塚調査報告』『考古学雑誌』第五二卷第四号
- 山倉貝塚調査団編 一九六九 『昭和四三年度市原市山倉貝塚調査報告』
- 八幡一郎編 『貝の花貝塚』松戸市教育委員会
- 横浜市教育委員会編 一九六五 『三殿台』
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 二〇〇七 『北川貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告三九

和洋女子大学史学研究室・同付属国府台女子高等学校社
会科編 一九六三 『松戸市千駄堀寒風遺跡』
N.G.Munro 1908 Prehistoric Japan (三ツ沢貝塚)